

# 自然に親しむ



羽田義任会員と南六呂師の昆虫観察を行う生徒たち。羽田先生は蜂の大家



松田吉雄会員は「植物で遊ぶ」を担当。草笛の鳴らし方を説明中。「自然は豊富なのに、今の子どもたちは遊び方を知らないのです」



天然記念物に指定されているイトヨのふ化を成功させた野村幹男会員の話を真剣に聞く。「イトヨの里」で



「ふるさとの手作り料理」を指導する羽生澄子会員（左から2人目）。なすの嫌いな子は多いが、大野名産のなすを使ったラザニア料理は子供たちにも好評だった

**郷土の自然と文化を子供たちに伝えたい**

「ふるさとクラブ」は今年で七回目となる。以前、地元で教鞭をとっていた萬谷正会員は、越前大野の美しい自然、郷土の文化を子供たちに教えることができなかつたかと考え、当時の副理事長の清水浩氏と開講の準備を始めた。地元で厚い信頼を得ている元先生の会員たちが集まった。

「ふるさとクラブ」の対象者は大野市在住の小学校三年生で、定員は毎年五十人である。今年は七月二十三日から十日間、土日を除く毎日、主に午前中行われた。学習内容は別表のとおりで、ふるさと大野の美しい自然と文化を学ぶことが中心になっている。

例えば地元の天然記念物であるイトヨ（トゲウオ科の淡水魚）の観察については、野村幹男会員が指導に当たるが、野村さんはイトヨのふ化に携わった著名な方である。また昆虫の観察を指導している羽田義任会員は蜂に関する大家で、日本中から



# ふるさとクラブ 地域全体から後押しされて

(社)大野市  
シルバー人材センター  
(福井県)

JR越美北線の  
越前大野駅



ふるさとクラブの  
主会場となった大  
野公民館



松井治男副理事長のあいさつ



## ふるさとクラブの今年度の学習内容

- ①南六呂師における昆虫を中心とした自然観察
- ②南六呂師における植物を中心とした自然観察
- ③プラネタリウムを使つての星の話
- ④大野の水とイトヨの観察
- ⑤植物で遊ぶ
- ⑥ふるさとの手作り料理
- ⑦木ざれを使つた動物作り
- ⑧ふるさとの民話や伝説
- ⑨郷土歴史館の見学
- ⑩ふるさとの遊び、おどり
- ⑪ふるさとの歌（水の湧くまち お寺まち）
- ⑫粘土を使つての焼き物作り
- ⑬「吉村おかき工場」「メダカの分校」の見学
- ⑭交通安全の話
- ⑮ふるさとの絵葉書を作ろう
- ⑯「夏休みの友」を中心とした学習相談



郷土歴史館で説明する小松英一会員。「自分自身が、ふるさとクラブに感激しています。仲間に入れてうれしいです」

## 九頭竜線で秘境を行く

JR越美北線は九頭竜線とも呼ばれ、福井と九頭竜湖を一時間半ほどで結ぶ秘境のローカル線である。もつとも急流をあえぎながら登つていくというイメージではなく、溪流沿いにのどかな田園風景の中を上がつていく鉄道である。越前大野に到着すると急に視界が開け、眼前に水田風景と、人口四万人の大きな町が広がる。(社)大野市シルバー人材センターの平成十四年三月末の会員数は五百八十六人、契約金額は三億一千万円を上げている。

越前大野の美しい自然と郷土の文化を子供たちに教えたい、という元教師たちの熱い思いが「ふるさとクラブ」開講の原動力である。実績のある指導者に対する親からの信頼は厚く、また郷土全体からもバックアップされて、今年も子供たちの瞳は輝いていた。

## 造型も勉強



「みんな上手になりました」と目を細める、ふるさとクラブの創設者である萬谷正会員



粘土を使った焼き物作りを指導する宮前敏雄氏。「趣味でやっている陶芸がお役に立ててうれしいです」

「ふるさとの絵葉書を作ろう」で熱心に子供たちを指導する大宮一幸氏



製材所の切れ端を使って様々な動物ができていた



本田光丸会員は元々美術の先生で、「木ざれを使った動物作り」を指導

も、朝六時から並んで待つ熱心な保護者もあるほどだ。

**地域に貢献**

「ふるさとクラブ」の参加費は五千円だが、センターから一人当たり五千円の助成金が出ている。島田理事長は、「この独自事業は、採算よりもシルバーのイメージ作りや地域からのシルバーに対する理解、宣伝になります。また地域に対して自分の人生経験を生かして貢献していく、というシルバー人材センターの理念にもかなうので、非常に有意義な事業だと考えています」と誇らしげに語ってくれた。

自然の観察においては森や湿地帯に入ることもあるので、特にママシの被害がいちばん怖い。このため同センターでは近くのお医者さんに血清を確保しておき、また万一来てて車を待機させておく、という慎重な体制を整えている。

「ふるさとクラブ」が終了する八月中旬には親からアンケートをとり、

## 郷土の文化を学ぶ



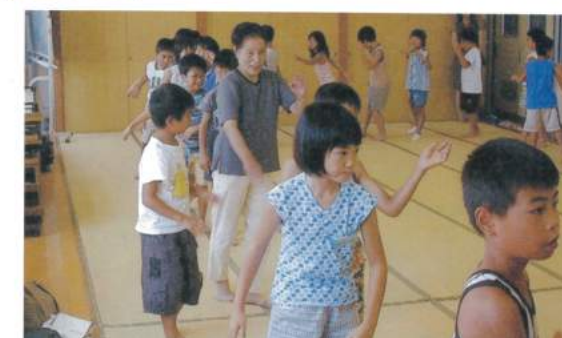
「ふるさとの民話や伝説」を楽しく伝える森下重行会員。「郷土を愛する心を育てるのも、年寄りの生きがいの一つです」



皆でイモリの手づかみに挑戦



ふるさとの歌「水の湧くまち お寺まち」を歌唱指導する西行紀代子会員。閉講式で全員で合唱した



ふるさとの遊びと踊りを指導する金森澄子会員



地元の産業「吉村おかし工場」を見学し、社会の勉強もした。説明するのは正津みち系会員



伝統的な遊びを教えてもらって、子供たちは大喜び

蜂に関する問い合わせが羽田会員に寄せられている。他の講師である会員の先生も、皆ふるさとの自然の良さを子供たちに伝えたいという熱意をもっている。また生徒の父兄たちも、子供時代に習った先生に再び子供を預ける安心感と、地元の優秀な指導者が教えてくれるため、親から寄せられる期待は非常に強いそうだ。

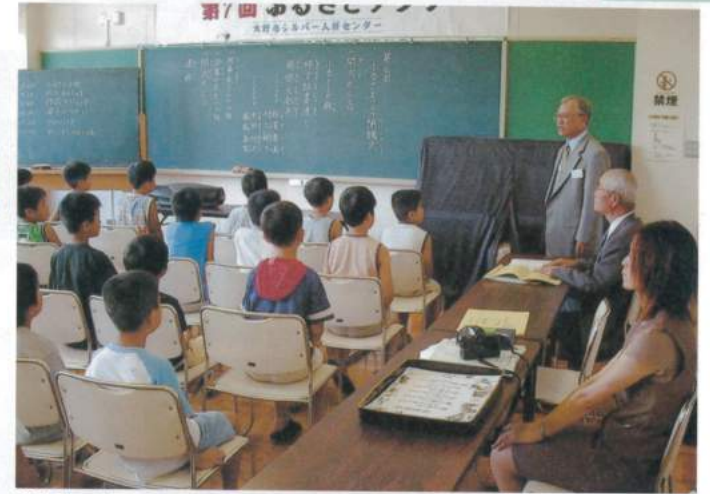
**地域全体が後押し**

毎年「ふるさとクラブ」の参加者募集に当たっては、北山孝雄事務局長と稲葉良雄運営委員長が地元の教育委員会と校長会を直接回って説明し、理解を求めている。パンフレットも郵送ではなく、各学校を回って説明し、手渡ししていく、という熱意のこもったものになっている。したがって「ふるさとクラブ」のパンフレットは学校の先生が生徒に配り、推薦してくれている。地域全体から後押しされているクラブということになる。そのお陰で大変人気があり、申し込み受付が八時半から始まる日

# 修了書が一人ひとりに



島田一成理事長から一人ひとりに修了証書が手渡された



閉講式が始まった。司会は北山孝雄事務局長



修了証書



ふるさとクラブの講師を務める各会員と事務局の皆さん。右端が第1回から担当している山田歩弓職員



稲葉良雄運営委員長のお話

また内容に関して父兄や生徒の意見も聞き、反省会をもつ。それを基にしてすぐ来年度の準備が始まり、一月にはその年の計画表が出来上がる。一年掛かりの作業が毎年繰り返されているわけである。

## 理想的な独自事業

現在この作業の中心となっているのが稲葉会員である。稲葉会員はこれらの細かい資料を作り、会議の手配を行い、期間中の写真撮影や記録作りまで行っている。事務局は進行状況を見守るだけだという。

「ふるさとクラブ」の実行委員長でもある松井治男副理事長は「稲葉さんの働きは会員として理想的です。自主・自立、共働・共助というシルバの理念をそのまま表していると思います。『ふるさとクラブ』は日本一理想的な独自事業だと、誇りに思っています」と語っていた。平成十三年度の「ふるさとクラブ」の契約金額は三十二万二千二百円となっている。(長野)